

古今和歌集

1 題知らず よみ人知らず

わがやどの池の藤波咲きにけり山ほと

とぎすいつか来鳴かむ

この歌、ある人の言はく、柿本人麻呂

がなり。 【夏 一三五】

私の家の庭の池の（ほとりの）藤の花【が咲いたよ】。山ほととぎす

【はいつ来て鳴くのだろうか】。

この歌は、ある人の言うことには、柿本人麻呂【の（作）である】。

題知らず 詠歌の機縁やあらかじめ決められていた【歌の題材】、モチーフなどが不明であるということ。

よみ人知らず 【作者】が不明であるということ。なお、【意図的に作者を隠す】

時にも用いられた。

わがやどの池 【私の家の庭】の池。「やど」には、家の戸口、家の前の庭、家

屋（建物）の意があるが、

ここでは、「池」がある場所のことであるから、家屋（建物）の前の庭をさす。

藤波 【藤の花】のこと。藤の花房がなびいて動く様子が、【波が打ち寄せる】ように見えることから「藤波」といった。庭の池のほとりに藤の花が咲いているのである。藤の花は、【春】の終わりから【夏】のはじめにかけて咲き、春歌、夏歌どちらにおいても詠まれる。

山ほととぎす 山にいるほととぎす。【人が住む里】に出て来て鳴くまでは、山の中にいるという発想。ホ

トトギス科の鳥。日本には【五】月に渡来し、【八】〜【九】月に南方に去る。

【夏】の鳥として歌に多く詠まれた。

いつか来鳴かむ ほととぎすは、いつやって来て鳴くのだろうか、【早く来て鳴いてほしい】ということ。

柿本人麻呂がなり 「が」は【連体修飾】格の格助詞、「なり」は【断定】の助動詞。柿本人麻呂【の】作歌である【よ】という意。この歌は「よみ人知らず」であるが、万葉歌人の柿本人麻呂の歌だとする人がいるという注記である。

鑑賞

『古今和歌集』の中でも古い時代の歌。【夏】歌の巻頭歌で、【夏】の鳥であるほととぎすが鳴くのをいよいよ期待する歌である。藤の花が咲くと、【春】から【夏】へと移行し、ほととぎすが鳴く時期が近いのだと考えられていた。『万葉集』には、

藤波の咲き行く見ればほととぎす鳴くべき時に近づきにけり（巻十八・四〇四二）

藤波の繁りは過ぎぬあしひきの山ほととぎすなどか来鳴かぬ（巻十九・四二二〇）

のように、藤の花は【ほととぎすが鳴く時期】の到来を告げるものとして繰り返し詠まれ、類型化している。

当該歌もこれらと同じ発想の歌であり、表現も近い。作者不明であるが、『万葉集』に近い時代の歌として考えられよう。【柿本人麻呂】の歌とする伝承があるのも故なしとしない。『古今和歌集』の歌の中でも八〇〇年代前半までの【よみ人知らず】時代とも言われる古い時代の歌で、縁語や掛詞などは見られず、典型的であるが素朴な味わいがある。

2 志賀の山越えにて、石井のもと

にても言ひける人の別れける折に詠

める 紀貫之

むすぶ手のしづくににぐる山の井のあ

かでも人に別れぬるかな【離別・四〇四】

志賀の山越えの道で、石で囲んだ湧き水のほとりで【言葉を交わした人が別れた時に詠んだ（歌）】。

【水をすくう手からこぼれるしづくで】濁ってしまう山の泉の水

【のように、十分に満足することなくあなたと別れてしまうのだなあ】。

志賀の山越え 現在の京都市左京区北白川から志賀峠を越えて滋賀県大津市へ通ずる道。比叡山南方の峠道である。

石井 石で囲んだ湧き水のこと。湧き水を石で囲んでためて、【水飲み場】とした所。

もの言ひける人 【言葉を交わした】人。『貫之集』の詞書に「志賀の山越えにて、山の井の女の手洗ひて水をむすびて飲むを見て詠みてやる」（八〇五）とあり、これに従えば、言葉を交わした相手の「人」は【女性】となる。たまたま出会った【女性と言葉を交わした】のである。

むすぶ手のしづくににぐる山の井 「むすぶ」は、【両手をまるくして合わせて水を掬

う】こと。「山の井」は詞書の「石井」に同じ。【水を飲もうと掬った時に手から落

ちる】事によって、澄んでいた泉は、底が浅いため濁ってしまい、【再び飲むことができなくなった】ということ。

あかでも 【満足する】ことなく。十分に【お話をするともできずに、お別れす

る】ことになりませぬ、まことに残念です、ということ。一方、上の句からの続きで、水を掬った時の滴で泉が濁ってしまい、【満足に水を飲む】ことができなかった、という意味を合わせ持つ。

作者 紀貫之（八七一？―九四六？）

父は紀望行（古今和歌集に一首入集）、母は未詳。父望行の兄弟、有朋の子が紀友則（古今和歌集に四六首入集、古今和歌集撰者）。最終官位は従五位上。『古今和歌集』の【撰者】となり、一〇二首が入集（集中第一位）、【仮名序】を記す。【撰者】の中でも指導的な立場にあり、特に重んじられた歌人であった。専門歌人として多くの歌合に出詠した。また、宮廷、権門貴族から頻りに屏風歌を依頼されて詠んだ。承平五年

（九三五）に、国司として赴任していた土佐国から帰京して、【仮名日記文学】の創始となる『土佐日記』を記した。私家集に『貫之集』がある。

3 題知らず 小野小町

うたた寝に恋しき人を見てしより夢て

ふものは頼みそめてき【恋二・五五三】

題不明

うたた寝【(の夢)】に恋しい人を【見てしまつてから】、夢というものを【を頼みにするようになった】。

うたた寝 寝床に入らずに、うとうと眠ること。

恋しき人を見て 恋しく思う人が夢に現れるのは、【相手が自分を思っている】からという俗信を背景とする。

夢てふもの 「てふ」は【】といふ【】の約。【今までは当てにしていなかった

た 【夢なんてものを、ということ。

頼みそめてき 「そめ」は【初め】。【信頼しはじめた。信頼するようになった。】

作者 小野小町 (生没年未詳)

【六歌仙】の一人。『後撰和歌集』には、【僧正遍昭】(八一六―八九〇年)との贈答歌が見え、九世紀半ばに活躍か。『古今和歌集』入集歌数は一八首。女性歌人では、伊勢に次ぐ第二位である。一八首中、一三首が恋の歌である。小町像は早い段階から伝説化され、多くの説話伝承を生み出した。私家集に『小町集』があるが、後代の他撰であり、小町の真作ではない歌が多く含まれている。

鑑賞

【六歌仙】の一人、小野小町の【恋】の歌。『古今和歌集』【恋】歌二の巻頭は、この歌を含む小野小町の歌が三首並んでいる。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

いとせめて恋しき時はむはたまの夜の衣を返してぞ着る

いずれも【夢】を題材とした恋の歌である。一首目は、恋しい人を思いながら寝たので夢で会えたと詠むが、それに対して当該の歌は、【思いながら寝た】のではなく、ふと寝てしまった時にも夢に見ることができた。それによって、いっそ【夢というものを頼みにするようになった】、というのである。三首目は、夜着を裏返して寝ると恋しい人を夢に見ることができるといふ俗信によるものである。

【六歌仙】の時代は、九世紀前半までの【よみ人知らず】時代の後、紀貫之ら『古今和歌集』の【撰者】よりも前の時代である。小野小町はこうした【夢の恋】の歌に特徴があり「夢の歌人」とも呼ばれる。この他、『伊勢物語』の「男」のモデルとなった【在原業平】など、個性的な歌人が登場する時代であった。

後撰和歌集

4 あひ知りて侍りける人のもと

に、返り事見むとて遣はしける

元良親王

来や来やと待つ夕暮れと今はとて帰

る朝といづれまさされり 【恋一・五二〇】

【親しくしておりました】人のところへ、(その人がどのような)返事【をするか試してみようと思つて贈つた(歌)】

【来るか来るかと(思つて)】待つ夕暮れと、今は【(お別れ)】と帰る朝とは、【どちらが(つらさが)まさっているだろうか】。

あひ知りて侍りける人 【互によく知っている】人。ここでは、【作者が通っていた親しい女性】をいう。

返り事見む 【どんな返事をするか、興味があるので見たい】。返事を期待して歌を贈ったのである。

来や来やと 【恋人を今来るか今来るかと思つて待つ】ということ。

今はとて 今 【もうこれで終わりといつて帰る】ということ。

いづれまされり 【「つらさ」という点では、どちらがまさっているのだろうか】ということ。

か 【】

作者 元良親王（八九〇―九四三）

陽成天皇の第一皇子。母は藤原遠長の娘。『後撰和歌集』以下の勅撰和歌集に二〇首入集。

色好みの風流人として著名である。その色好みの逸話としては、特に『小倉百人一首』「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」が著名。これは『後撰和歌集』

恋五（九六〇）の歌で、藤原時平の娘で宇多天皇の女御であった京極御息所との関係が露見

した時に贈られたものである。元良親王の歌は、歌物語の『大和物語』にも、六

つの章段で合計九首が採られている。

鑑賞

『元良親王集』によれば、この歌は、まず監げんの命婦に贈られた。その返歌をおもしろく思った親王は、他の人々にも返歌を詠ませた、とある。『栄花物語』巻第十「ひかげのかづら」では、親しく通っていた女性たちに返歌を詠ませたとある。色好みの男らしい振る舞いである。【来ない相手を待っている】夕方と、【もはやこれまでと別れる】朝とどちらがつかいか、これは確かに難問である。これを贈られた女性たちは、その各自の体験を思い返しつつ、それぞれの答えを歌にして返した。貴族たちの社交の様子が目に浮かぶようである。

返し 藤原かつみ

5 夕暮れは松にもかかる白露のお

くる朝や消えは果つらむ【恋一・五一】返歌

夕暮れは【待つことばかりに（心が）】かかり、【（その身は）松

にかかる】白露のようで【（今にも消えそうで）】【起きて

（恋人を）送る】朝には、【（その置いていた白露のようなが身は）

消え果ててしまっているだろうか】。

夕暮れは松にもかかる白露 夕暮れは松にもかかっている白露、と直訳できるが、

【松】に【待つ】を掛け、夕方は【待つ】ことばかりが心にかかる

という文脈を含ませている。さらに、夕方に待つ身というのは、細い松の葉に置く白露のよう

に、【かろうじてそこにとどまっている】ようなものだ、というイメージを持たせて

いる。

おくる朝や消えは果つらむ 【起きて男を送る朝は、消え果てているだろう】と

いうこと。「おくる」は【起くる】と【送る】を掛けるが、さらに「白露が置

く」意を掛け、夕方にかろうじて存在していた白露のようなが身は、朝には【別れの辛

さですっかり消え果ててしまう】だろう、という意味になる。つまり、【朝の別

れ】の方がよりつらいという答えである。

鑑賞

はなかい【白露】を巧みに比喻に用いた返歌である。

後拾遺和歌集

6 陸奥国にまかり下りけるに、白

河の関にて詠み侍りける 能因法師

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹

く白河の関 【羈旅・五一八】

陸奥国に下向しました時に、白河の関で詠みました（歌）

都を霞が立つの ともに旅立ったけれども、秋風が吹いている。

ここ白河の関では。

語句・表現の解説

陸奥国 現在の福島、宮城、岩手、青森の四県に相当する東山道の大国。

「みちのく」は、「みちのおく」が変化した語。

まかり下りけるに 「まかり下る」は丁寧語（または謙讓語）で、かしこま
った言い方。

白河の関 現在の福島県白河市にあった関所。ここから陸奥国に入る。

霞とともに立ちしかど 「霞」は春の代表的景物。霞が立つのと同時に旅
立ったけれど。「立つ」は春霞が立つ意と都を発つ（出立する）意を掛け
る。

秋風ぞ吹く白河の関 白河の関では、秋風が吹いているということ。都を春
に出発してから半年が経過し、この白河の関に辿り着いた。

作者 能因法師（九八八—？）

俗名は、橋 永愷（ながやす）。出家してはじめ融因といったが後に能因と
改める。古曾部入道、橋入道とも。子に橋元任（後拾遺和歌集以下に五首入
集）がいる。出家前は文章生で肥後進士と号した。二六歳、長和二年（一〇
一三）頃に出家し、陸奥をはじめ諸国に下向して旅の歌を多く残した。後
西行法師に大きな影響を与えた。藤原長能を歌の師とし、藤原公任らとも
交流があった。『能因歌枕』を著し、また、一条天皇の時代から約六十年間
の歌人の秀歌を撰んだ私撰集『玄々集』を編纂した。『後拾遺和歌集』以下
の勅撰和歌集に六五首が入集している。私家集に『能因法師集』がある。

鑑賞

能因法師の陸奥の旅の歌。『能因法師集』によれば、能因は二度陸奥の旅
に出ている。能因が歌を残している地は、信夫、武隈の松、末の松山、塩
釜、象潟などである。この白河の関の歌は、万寿二年（一〇二五年）の初度
の旅でのものと考えられる。都を春に出立したのに、ここ白河の関では、も
う秋になってしまっている、思えば遠くに来たものだ、という感慨。『袋草
紙』によれば、藤原国行が陸奥下向の際、白河の関を過ぎる時に、特別に身
だしなみを整えた。人がなぜそのようにするのかと尋ねたところ、能因が
「秋風ぞふく白河の関」と詠んだ場所をどうして普段着で通り過ぎられよう
か、と言ったという。

また、西行法師は、この能因に憧れて陸奥の旅に出て、白河の関では能因
の歌に思いを馳せている。

陸奥国へ修行してまかりけるに、白川の関に泊まりて、所柄にや、常よりも月おもしろくあはれにて、能因が「秋風ぞふく」と申しけむ折、いつなりけむと思ひ出でられて、名残り多くおぼえければ、関屋の柱に書き付けける
白川の関屋を月の洩る影は人の心を留むるなりけり（山家集・一一二六）
この後、西行は能因の足跡を辿るように秋の陸奥を北上した。
このように、能因、西行と陸奥の旅の歌が積み重ねられて歴史がつくられ、その延長線上に、松尾芭蕉の『奥の細道』の旅がある。

なお、この能因の歌をめぐっては、実際には陸奥に下向せず、自宅に潜んで姿を隠していたという逸話が語られるようになる。『袋草紙』に

能因、実には奥州に下向せず。この歌を詠まんが為に窃かに籠居して、奥州に下向の由を風聞すと云々。二度下向の由書けり。一度においては実か。とあり、『十訓抄』（巻第十・十）、『古今著聞集』（一七一）にも同様の説話がある。こうした説話が生まれる背景には、やはり陸奥の旅の過酷さがあつたのだろう。

男に忘られて侍りけるころ、貴船に
参りて、御手洗川に蛍の飛び侍りける
を見て詠める
和泉式部

7 もの思へば沢の蛍もわが身よりあ
くがれ出づる魂かとぞ見る

【雑六・神祇・一一六一】

夫に忘れられておりました頃、貴船神社に参詣して、御手洗川に蛍が飛んでおりましたのを見て詠んだ（歌）

思い悩んでいると、沢辺に飛ぶ蛍も、わが身からさまよい出た魂ではないかと思えるよ。

語句・表現の解説

男に忘られて 『俊頼髓脳』に「和泉式部が保昌に忘られて貴舟に参りてよめる歌」とあり、これによれば、「男」は一度目の夫であった

藤原保昌 のこと。

貴船 現在の京都 市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社のこと。

御手洗川 貴船川 のこと。参拝者はここで身を清める。

もの思へば 思い悩んでいると。詞書に「男に忘られて」とあるので、夫との関係についての悩みであろう。

あくがれ出づる魂 魂が本来いべき身体から離れてさまよい出た。沢の蛍はそのさまよい出た魂なのではないかと思つたということ

と。「あくがる」は、本来いべき場所から離れるということ。「かる」の語源は「離る」。「心」が対象に引きつけられて本来の場所からさまよい出る。現代語の「憧れる」の古い形。「身」が本来の場所から離れ

てさまよう場合は、旅に出るといふ意となる。

作者 和泉式部(生没年未詳)

越前守大江雅致の娘。母は越中守平保衡の娘とされる。和泉守橘道貞と結婚し、小式部内侍を産む。為尊親王、敦道親王と恋愛し、道貞との関係は破綻する。寛弘六年(一〇〇九)には、一条天皇中宮彰子のもとに出仕し、道長の家司藤原保昌と再婚、その任地でもある丹後に同行した。『拾遺和歌集』以下の勅撰和歌集に二四四首入集。著作に、敦道親王との恋愛を中心に描いた『和泉式部日記』があり、私家集に『和泉式部集』がある。

鑑賞

恋に生きた和泉式部の二度目の夫に忘れられた時の歌。『後拾遺和歌集』雑六「神祇」の小項目の中に収められている。「神祇」は神や神社に関連する歌である。貴船神社で詠んだこの歌を、貴船の明神が聞いて歌を返してきたという。『後拾遺和歌集』には、その返歌も合わせて収載されている。

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬のたま散るばかりものな思ひそ

(奥山に激しく流れ落ちる滝の水玉のように、魂が散るほどに思いつめるな)

この歌は貴船の明神の御返しなり、男の声にて和泉式部が耳に聞えけるとなんいひ伝へたる。

千載和歌集

8 花の歌あまた詠み侍りける時

円位法師

花に染む心のいかで残りけむ捨て果て
てきと思ふわが身に 【雑中・一〇六六】

花の歌をたくさん詠みました時(の歌)

花に執着する 心がどうして 残ったのだろうか。(世俗を)捨てきったと思うわが身に。

語句・表現の解説

花に染む心 花に執着する心。ここでの花は桜と考えてよい。西行は特に吉野山の桜を愛した。

捨て果ててき 出家して完全に世俗を捨ててきた、ということ。そう思っていたのだが、花に執着する心は残ってしまっていて、捨て切れていなかったのである。

作者 円位法師(西行法師)(一一一八—一一九〇)

俗名、佐藤義清。父は佐藤康清、母は今様の名手監物源清経の娘。藤原秀郷の嫡流で、曾祖父の公清から佐藤氏を名乗り、檢非違使・左衛門尉を継ぐ。奥州藤原氏とも同族。徳大寺実能の家人、鳥羽院の北面で、妻子もあつたが、二十三歳で出家した。法名は「円位」、号を「西行」といった。初め京都郊外に住むが、能因に憧れ、歌枕を訪ねて陸奥へ旅をした。その後、吉野山に入って桜を歌い、長く高野山を拠点とした。鳥羽院の葬送に同行し、保元の乱では仁和寺に潜伏した崇徳院を訪ね、讃岐配流後も深く交流し、没

後には、四国に崇徳院の墓を訪ねている。晩年は伊勢に移住し、伊勢神宮に自らの歌を歌合の形にして奉納する『御裳濯河歌合』『宮河歌合』。重源の依頼により、東大寺大仏沙金勸進のために再び奥州平泉に趣く。途中、鎌倉で源頼朝と対面した。七十三歳、生前に「願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」と願っていた通りに、二月十六日に入滅し、人々を驚かせた。藤原俊成と交流を深くし、後継の藤原定家、家隆、慈円らに多大な影響を与えた。自撰の私家集に『山家集』『聞書集』『残集』等がある。『千載和歌集』に一八首が入集。後鳥羽院に高く評価され、『新古今和歌集』には九四首（第一位）が入集した。没後、『西行物語』など、説話化された西行像が流布した。

鑑賞

出家遁世者の迷いの心。世俗での生き方、考え方、感じ方をすべて捨て去って出家したはずの我が身に、桜の花に執着する心は出家前のまま変わらずに残ってしまったている。いったいなぜ、という心。出家直後の詠歌か。西行は、仏道修行者でありつつも、特に吉野山において、出家後も多くの桜の花の歌を詠んだ。出家することは、あらゆる執着を断つことである。それは家族への恩愛や自然を愛でる心も含まれる。しかし、そうした執着をなかなか断つことができない心、あるいはますます執着してしまいう心を、西行は素直に歌にしていくなのである。『山家集』では、この歌の直後に
願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ
仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば
と、桜への執心を詠んだ名歌が続く。

新古今和歌集

水無瀬恋十五首歌合に、春恋の心を

9面影のかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に

【恋二・一一三六】

皇太后宮大夫俊成女

水無瀬恋十五首歌合で、春の恋の心を（詠った歌）

（あの人の）面影がぼんやりと 見える霞んだ 月が宿っている

よ。春は昔のままの春 ではないのかと、嘆いてこぼした 袖の涙

語句・表現の解説

水無瀬恋十五首歌合 建仁二年（一一〇二）九月十三日に行われた。水無瀬は大阪府 三島郡島本町広瀬付近の地名。ここに後鳥羽上皇の離宮があった。上皇はしばしばここに行幸して歌会を開いた。この時の歌合は、恋歌のみの十五番の歌合で、良経、慈円、定家、家隆、宮内卿らが参加した。

春恋 この時の題はすべて恋で、以下の十五題。春恋、夏恋、秋恋、冬恋、

暁恋、暮恋、羈中恋、山家恋、故郷恋、旅泊恋、関路恋、海辺恋、河辺恋、

寄雨恋、寄風恋。

面影のかすめる月 恋人の面影がかすんで見えるような、霞がかつた春の朧月。「かすめる」は掛詞で、面影がかすむ意と、かすんだ月の意を掛ける。

宿りける 第五句からの倒置で、袖の涙に月が宿っている、ということ。

春や昔の袖の涙 『伊勢物語』 第四段、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の歌と物語を踏まえる。春は昔のままではないのかと嘆き、涙が袖にこぼれている、ということ。

作者 藤原俊成女（一一七一？—一二五二？）

母は藤原俊成の娘、八条院三条、父は藤原盛頼。盛頼が鹿ヶ谷の変で兄の成親に連座して解官されたため、祖父母の俊成夫妻が養育した。源通親の子、通具と結婚。その後、後鳥羽院の目に止まり、後鳥羽院歌壇の有力な女房歌人として、宮内卿とともに活躍した。『新古今和歌集』入集数二九首は、女性歌人第二位である。私家集に自撰の『俊成卿女集』がある。

鑑賞

物語を背景として詠んだ歌。物語を踏まえることを「本説取り」という。

忘れられない恋人の面影が霞んで見える朧月が、袖に落ちる悲しみの涙に宿っている。「春や昔の袖」とは、『伊勢物語』第四段の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の歌と物語を踏まえた表現である。（↓I部歌物語『伊勢物語』「月やあらぬ」参照。）「春は昔のままではないのか」と思っている私の袖、ということ、わが身を『伊勢物語』の主人公に重ね合わせ、恋人を忘れられずにいる昔のままのわが身を嘆く歌となっている。『伊勢物語』でも「月」が印象的に描かれているが、それを恋人の面影を映すものとして、また春の美しい朧月として、袖の涙の中に表現した点が一層悲しみを誘う。